

小学校社会科の問題解決的学習でのタブレット端末の活用デザイン

樋口 勇輝（八代市立八代小学校）・山本 朋弘（鹿児島大学教育学系）

概要：本研究では、小学校社会科において、問題解決的学習での個人思考の充実と協働的な学びの展開に注目して、一人一台のタブレット端末をどのように活用をするか、その活用デザインを検討した。授業映像や完成作品を分析した結果、タブレット端末を個人思考の場面や協働的な学びの場面で意図的に組み込むことによって、考えを比較・関連・総合づけ、さらに思考を深めていく様子が見られ、問題解決に取り組む児童の姿が多く見られるようになった。

キーワード：アクティブ・ラーニング、問題解決的学習、協働的な学び、タブレット端末

1 はじめに

中央教育審議会（2015）は、児童生徒が課題に対して主体的に学ぶ「アクティブ・ラーニング」の充実を提案し、深い学び、対話的な学び、主体的な学びの3つの学びの過程を提示した。

このことを踏まえ、私自身も社会科における「協働学習」の充実を目指して、日々の教材研究や研究授業に積極的に取り組んできた。

しかし、これまでの実践から、児童が自分の考えを広げたり深めたりするためには、友だちとのかかわり（協働）や生活経験、学習経験、そして自分の生き方にまでかかわろうとする態度を養うことが必要であり、そのような学習展開を授業の中でデザインするためには問題解決的学習の設定が極めて重要であると考えてきた。

また、樋口ら（2014）によると、タブレット端末を活用し、新聞制作を単元全体で進めるようにし、授業の中で問題解決のための映像視聴や考えの共有を図ることで、児童同士で考えを比較・関連・総合付けることができ、考えに広がりや深まりが見られた児童も多くみられるようになったことが報告されている。しかし、この実践においても課題設定（学習課題）が児童の主体的な学びに及ぼす影響が大きいことが指摘されている。

以上の先行研究や学習指導要領の改訂の方向性から、今回は問題解決的学習での個人思考の充実と協働的な学びの展開に注目して、一人一

台のタブレット端末をどのように活用をするか、その活用デザインを検証し、実践から得られた成果を報告することとした。

2 実践の方法

（1）調査対象

小学校6年生32名の児童を対象に、社会科、単元名「世界の未来と日本の役割」（東京書籍）での実践を行った。授業の映像を記録して、授業者が振り返り、気づきや課題を出していくようにした。また、学級の児童数32名の中から数名を選定し、単元終了後に、授業や家庭学習に関する児童向けの意識調査を行った。

（2）活用の視点

本研究では、表1の視点を持って、タブレット端末活用の授業を設計することとした。児童が主体的に問題解決に取り組むためには、まず個人思考の充実が重要であると考えた。ここでは、家庭での事前学習を行うことで個人思考の時間を十分に確保すること、授業外でも児童相互の議論ができることねらいとし、取組を行った。また、児童同士の関わり合いの中で新たな価値を創造する協働的な学びの展開も重要であると考えた。児童が新たな価値を創造するためには、多様な考えを持った児童の存在が必要であり、学び合ったことをもとに自分の考えを再構築することをねらいとし、取組を行った。

表 1 授業設計の視点

研究の視点	タブレット端末活用の視点
(1) 個人思考の充実	①タブレット端末の持ち帰りによる説明資料作成 ②e ラーニング活用による児童相互の議論
(2) 協働的な学びの展開	③課題別学習(ジグソーの学習)による授業展開 ④「シンキングツール(思考ツール)」の活用 ⑤課題解決に向けたプレゼン作成と評価

3 実践の実際

(1) 個人思考の充実

①タブレット端末持ち帰りによる資料作成

タブレット端末を家庭に持ち帰らせ、各時間の学習課題についてプレゼンを作成させた。前時までに「世界で活躍する人々は、どんな思いや願いをもって活動しているのだろうか。」という学習課題を児童に提示し、家庭で作成した説明資料をもとに授業を展開した。児童はそれぞれの家庭で、教科書や資料集、インターネットを活用しながら事前学習を進め、予習形式でプレゼンを作成して授業に臨む。(図2) タブレット端末を家庭に持ち帰り、事前学習を行うことで、個人思考の時間を十分確保することができ、教室内での協働学習の充実を図ることができると考えた。また、身近な生活経験や学習経験を引き出し、保護者と協力しながら学習課題に取り組むなど、児童がより主体的に課題に向き合う姿が見られた。

②e ラーニング活用による児童相互の議論

学習問題(「平和な世界の実現に向けて、自分たちにできる「国際協力」とはいったいなんだろう」)について、単元を通してeラーニング上で議論させるようにした。(図3)。最初は、児童が学校生活の中で身近に行っている活動についての書き込みが多かった。しかし、学習が進む中で、「世界には貧しい国々があること」「戦争がなくなる地域があること」「環境問題が悪化し続けていること」などを知り、「戦争の悲惨さや平和の尊さをもっと強く伝える必要がある」等、情意面の変化も多く見られた。(表2)

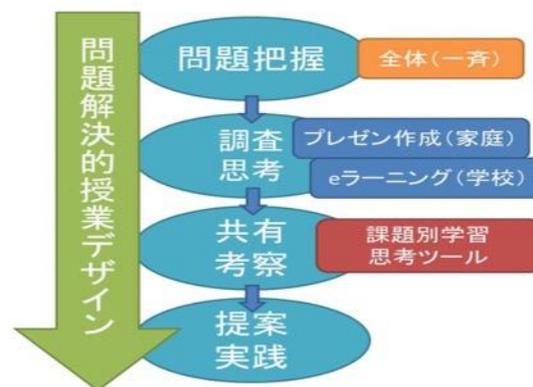


図 1 問題解決的学習の授業設計イメージ



図 2 家庭でのプレゼン作成の様子

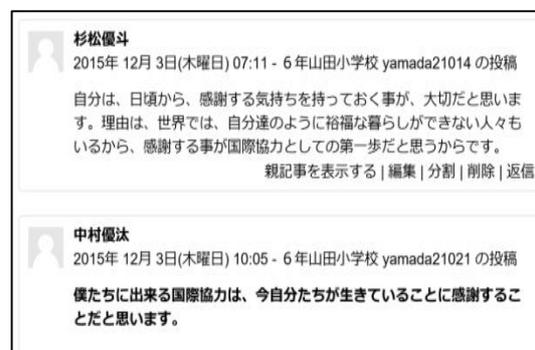


図 3 児童の e ラーニングへの書き込み

表 2 e ラーニングに出現した児童の考え

内容	数	出現率
募金・物資支援に関すること	54	32%
ボランティア活動に関すること	43	26%
環境問題解決に関すること	31	18%
世界への情報発信(交流)に関すること	28	17%
戦争の解決、平和な世界の実現に関すること	12	7%

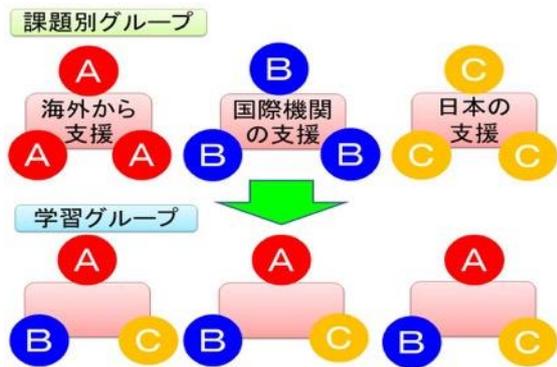


図4 課題別（ジグソー的）学習のイメージ図



図5 学習グループでの意見交流



図6 大型ホワイトボードにまとめる児童

(2) 協働的な学びの展開

①課題別（ジグソー的）学習による授業展開

これまで獲得した見方・考え方をもとに、「東日本大震災発生時にはどのような国際協力があったのか」について課題別で調べる場面では、A「海外からの支援」B「国際機関からの支援」C「日本の支援」という3つの課題別グループに分かれ、学習課題「なぜ、世界の国々はお互いに支援・協力し合うのだろうか」について、プレゼンにまとめさせた。その資料をもとに「平和な世界の実現に向けて、これから必要な国際協力」について学習グループ（A+B+C）で考え

させた。（図4を参照）児童の反応は次の通り。
 A「東日本大震災では海外からたくさんの支援があったよ。」B「ユニセフやユネスコからの支援もたくさんあったよ。」C「日本も戦争の後、いろんな国に支援しているよ。」C「やっぱり、経済的に豊かな国の支援が多いのかな？」A「いや、発展途上国からの支援もたくさんあったよ。」A「日本と発展途上国は良きパートナーなんじゃないかな。」B「そうだね。援助するというよりもサポートすることが大事じゃないかな。」C「そうか、みんな『恩返し』の気持ちをもっているんだね。」A「それが結局、世界の平和につながるんじゃないかな。」

自作の資料を活用しながら協働して学び合うことで、児童は責任をもって自分の役割を果たし、さらに主体的に自分の考えを伝えようとする児童の姿が見られ、思考の広がりや深まりを感じた。（図5）また、支援に当たった160カ所以上の国や地域の中で、日本より厳しい状況に置かれている発展途上国がたくさん含まれていたことから、「自分たちはどんな思いや願いを大切にして国際協力を行うべきか。」について個人でさらに深く追究させた。

②「シンキングツール（思考ツール）」の活用

課題別学習を通して、児童はタブレット端末の資料を根拠にチームでの活発な議論を行った。その際、シンキングツール（思考ツール）の一つとして議論の結果は大型のホワイトボードにまとめさせるようにした。これまでの実践でも、ホワイトボードを活用する場面はあったが、特定の一部の児童による書き込みが多いように感じていた。3人1組のチームの場合、大型ホワイトボードであると同時に書き込むことができ、それぞれが役割分担しながら課題別の資料から分かったことを根拠を明確にしてチームの考えをまとめることができた。また、ホワイトボードにまとめる際には、文章でまとめるのではなく、図式化しながらまとめることを意識させた。（図6）根拠となるキーワードを示しながら相手を説得・納得させることが大切であると考えたからである。さらに、チームでまとめたホワイトボードを全体で共有し、考えの共通点や相違点を全体で見出しながら、新たな課題の発見・解決につなげることができた。

③課題解決に向けたプレゼン作成と評価

単元終末の深める段階において、「現在、日本や世界では平和な世界を揺るがすような問題が山積しています。そこで、これまでの学習をもとに、平和な世界の実現に向けて、今最も必要な『国際協力（自分たちにできる）』について考え、村長に提案しよう。」というパフォーマンス課題を児童に提示し、一週間の期間を設定して課題に取り組ませるようにした。児童はパフォーマンス課題の解決に向けて、計画を立て、解決策を作成・検討し、プレゼンを作成した。（図7）計画の段階では、児童は友だちの資料を参考にしながら自分の計画を見直し、修正を図ることができた。また、作成したプレゼンをもとに、それぞれのプランは「課題の解決につながるか」「相手を意識しているか」「実現可能か」「先進性はあるか」などの視点で評価を行った。

さらに、協働して学び合ったことの実践化につなげるため、「子ども議会」で児童が作成したプレゼンを提案する機会を設けた。その中で、村長や行政職員の方々に参加していただき、提案に対する意見や感想（評価）をもらうようにした。村長からは、「これから国際社会に貢献できる立派な社会人になってほしい」という温かい言葉をいただいた。（図8）

5 実践のまとめ

本実践の成果について、以下にまとめた。

- 課題別学習では、個人に与えられる課題は他と違ったものであり、自分が役割を果たせなかったら課題が解決しない、目標が達成できない状況をつくったことで、学習グループでの思考活動に責任を持って参加し、主体的に学び合う姿をさらに高めていくことができた。
- 単元を通した学習問題や一単位授業での学習課題の設定により、考えを比較・関連・総合づけながら思考を深めていく児童が増えた。
- 家庭や学校でのプレゼン作成により、見えにくい学力と言われる「思考力・表現力」を可視化することができ、学びの見取りや評価の蓄積につなげることができた。
- 単元を通した授業展開にストーリー性を持たせることで、主体的・協働的に学び合おうとする児童が増え、問題の発見や解決に向けた児童の資質・能力を伸ばすことができた。



図7 児童が作成したプレゼンの一部



図8 子ども議会での提案

6 おわりに

児童が主体的に学習を進め、社会的現象や他者と自らかかわり合い、協働しながら問題解決を図る力をしっかりと身に付けることができるように日々の実践に取り組んできた。今後も効果的なタブレット端末の活用を考え、さらなる実践を積み重ねていきたい。

参考文献

- ・中央教育審議会：「教育課程企画特別部会における論点整理について」，2015
- ・樋口，山本：「小学校社会科での単元を貫く言語活動の充実に向けたタブレットPC活用の具体的展開」，2014